

コロナ陽性での気力減退から回復 お泊りデイの利用者に 寄り添う日々



町野美和

理事

千葉ケア企業組合代表

昨年2月末に新型コロナウイルスのPCR簡易検査で陽性になった。きっかけは、運営している「デイサービスまさご」の利用者2人がコロナに罹患して入院したことによる。私も濃厚接触者となり、千葉市が介護保険施設に配布している測定器で検査した結果だった。発熱はなかった。

あわや事業ストップを覚悟

施設職員が陽性と判明すると、運営中止の指示がくる。症状がないので医者に行こうかどうかしようか迷っているうちに、2日後に再度測定したら陰性になってしまった。

そういうことなので、特に治療をしたわけではない。しかし、その後の3カ月ほど、気力が減退して何事もやる気が起きなくなった。明らかにコロナの後遺症だと思った。

私自身はケアマネジャーでもある。毎月、介護保険計画を作成し、その説明と承認を得るため、24人の介護保険利用者宅にモニタリングに行かねばならない。4月には年度末の報告書と次年度の計画書を作成する事務仕事に追われ、一向に利用者宅を訪問する気にな

れず、3カ月も放っておいた。

一部の利用者が千葉市にモニタリングを受けていないと訴えたため、半年後に、同市から実地指導を受けた。過去5年間分のケアマネ利用者のファイルを提出したうえ、事業所に担当者3人が監査に来た。

ちょうど、5年ごとの継続手続きをしている最中。この事件で、居宅介護支援事業（ケアマネ事業）は打ち切りになってしまうのではと、半ば覚悟していた。だが、処罰はなく、ケアマネ事業は無事に5年間延長となり胸をなでおろした。

寝たきりで退院、 自宅復帰に歩行訓練

私は現在、73歳。ケアプラン作成とデイサービス（地域密着型通所介護）、訪問介護の3事業を運営している。

事業所の近くは50年近く経たエレベーターのない5階建ての団地ばかり。ほとんどの住民は独居や高齢所帯。朝早く歩いているのは、犬を連れて高齢者だけ。

デイサービスには、78歳の要介護3の男性が、4月7日の退院以来、ずっと宿泊を続けている。エレベーターなしの団地の4階に一人暮らし。3カ月もの寝たきりの病院生活のため、筋肉が弱り歩けない。自宅復帰には階段昇降ができるよう歩行訓練が必要だ。

自分で導尿の袋を外したので、トイレで汚れたパッドと紙パンツを私たちスタッフが交換している。

デイサービスは、夜間宿泊ができる「お泊り」の許可を行政から得ていた。法的には問題がない。遠方に住む家族は、介護費が年金で賄えるならこちらにお任せとばかり、丸投げである。年金は1カ月12万円ほどしかない。

深夜のトイレ介助、汚れ物の洗濯

私と准看護師さんが1日おきに交代で夜勤にはいる。夜6時頃に食事を摂り、10時過ぎにベッドから起こしてトイレに誘導。汚れたパッドと紙パンツをはずすと尿があふれ、濡れたズボンとシーツを交換する時も。深夜1時と5時頃にまたトイレ誘導である。

夜間3回のトイレ誘導で、シーツやズボン、かけ布団など汚れ物の洗濯・乾燥に追われる。1回30分くらいだが、寒い日は足が冷えこみなかなか寝付けない。寝不足になり頭がクラクラすることもある。

施設に入所してもらいたいが、資産は年金だけ。グループホームは1月約18万円、有料老人ホームは約24万くらいかかる。とても足りない。デイサービスでの宿泊介護をしばらく続けなければならぬだろう。

彼のように独居で他に行き場のないデイサービス利用者が6人もいる。人生100歳時代。いつまで、デイサービスを続けたら良いかと私たちは悩んでしまう。

高齢者の自動車事故を見聞きする度に、安全運転、十分な車間距離、整理整頓を心がけている。身の丈にあった、心がけて75歳までは、なんとか、仕事を頑張ろうと思う。

仙台市と京都市で開催

子ども食堂、カフェ事業者などが登壇

「コミュニティカフェ等、地域共生社会のための活動の担い手育成事業」

WACは、地域共生ボランティア活動の発展を目的に啓発イベントとボランティアの養成講座を開催しました。全体テーマは「地域共生ボランティアのすすめ」です。

この事業を開催しようとした大きな理由は、近年のWACをはじめとするNPO等非常利団体の現状に対する危機感があります。WACは設立当初からボランティア活動と高齢者の生きがい活動の推進を目的に全国的な支援活動を行ってきました。

高齢者疑似体験や介護教室はそのツールです。1990年代、多くの市民互助型団体が立ち上がり、その後、介護保険の開始とともにNPO法人化して活動を活発化してきました。

中心になったのは団塊の世代であり、元気高齢者のみなさんでした。それから20年以上経ち、その方々の多くが後期高齢者となりつつあります。助け合い活動等のボランティア団体では会員の高齢化と減少に悩む声が聞かれます。

そこにコロナが襲い、行動制限によって高齢者から生きがい活動を奪ってしまいました。中には意欲の低下、健康の悪化を招き、取り返しのできない事態となってい

る人もいます。

WACの生きがい活動グループも、コロナ2年目あたりから、会の解散を告げられるようになりました。コロナ3年目の今年度、活動休止の範囲は助け合い活動グループまで広がっています。

厚生労働省が掲げているビジョン「地域共生社会」とは程遠い現実です。そこで、ささやかでも、WACが目指してきた「地域住民が世代や分野を超えてつながること、地域を共に作っていく社会の実現」に近付くような事業をと、思い立ちました。

コロナ禍で鮮明になった生きがいの場の喪失の危険性、社会からの孤立といった負の連鎖から、WACが長年取り組んできた生きがい作り、活躍の場の創出に向けて取り組み、発信したいと考えました。

貧困問題からくる学習支援や子ども食堂などの情報、高齢者ケア、変わりゆく社会の中でのボランティア活動などをくみ取っていただきたいと願っています。

会場は仙台市と京都市。東北と近畿のネットワーク、仙台・京都両市のWACポイントとともに実施しました。

残念ながら一般参加者は少なかったのですが、満足度、理解度ともに100%に



京都市国際交流会館で10月2日に開いた「啓発イベント」

近い結果を得られたと思います。

現在は、講演内容を一部オンデマンド配信（3月6日まで）しています。介護の専門職や若い世代からも視聴希望が届いています。視聴希望の方はお問い合わせください。視聴方法等を丁寧にご説明します。このほかサブテキストも作成する予定です。今回の催しは、日本財団の助成による、「コミュニティカフェ等、地域共生社会のための活動の担い手育成」の事業として進めました。

WACがこのような大がかりな事業に挑むのは2013年、2014年の福祉医療機構のWAM助成（社会福祉振興助成事業）の「全国的・広域的ネットワーク活動支援事業」以来、久々のことです。また、WAC本部とWACネットワークセンターが共同で開催したイベントは、2017年2月の「WAC在宅介護フォーラムin滋賀」以来です。

（事務局長・常務理事／小林里美）

「地域共生ボランティアのすすめ」事業概要

仙台会場●仙台市シルバーセンター、仙台市民会館)		京都会場●京都市国際交流会館、ハートピア京都	
啓発イベント	9月25日㊤ 14時～16時20分	啓発イベント	10月2日㊤ 14時～16時20分
基調講演	池田昌弘 (NPO法人全国コミュニティライフサポートセンター理事長)	基調講演	早瀬昇 (社会福祉法人大阪ボランティア協会理事長)
パネルディスカッション	清水福子 (認定NPO法人あかねグループ理事長)	パネルディスカッション	小辻寿規 (立命館大学准教授)
	佐藤宏美 (NPO法人おりざの家理事長)		宇野明香 (NPO法人happiness理事長)
	對馬良美 (認定NPO法人キッズドア東北事業部長)		狭間明日実 (バザールカフェ)
ファシリテーター	浅川澄一 (ジャーナリスト、WAC理事)	ファシリテーター	浅川澄一 (ジャーナリスト、WAC理事)
地域ボランティア養成講習	10月22日㊤、11月5日㊤ 14時～16時	地域ボランティア養成講習	10月23日㊤、11月6日㊤ 10時～12時
第1回 ボランティアの楽しみを知らう ～総合編	昆布山良則 (東京2020オリンピック・パラリンピック大会ボランティア)	第1回 ボランティアの楽しみを知らう ～総合編	小辻寿規 (立命館大学准教授)
第2回 ボランティアの楽しさを語らう ～実践編	清水福子 (認定NPO法人あかねグループ)	第2回 ボランティアの楽しさを語らう ～実践編	金治宏 (京都光華女子大学准教授、NPO法人happiness理事)
見学実習	キッズドア	見学実習	happiness、バザールカフェ

基調講演

「つながる」から「気」にかけ合う仲」に

池田昌弘さん
NPO法人全国「コミュニティライフサポートセンター」理事長

「通いの場」の多くはコロナ禍で自粛していますが、案外、自発的な小さな集まりは広がっています。気になる人の家の前を通ったり、野菜を玄関先まで届けたり、夜電気がついているか見たりです。

群馬県の太田市の社会福祉協議会がアンケートで聞いたところ、いろんなことが分かりました。

85歳の一人暮らしの女性はコロナ前にしていた地域の役目がなくなりました。代わりに、ご近所さんとマスクを作り、友達

と絵手紙を交換し、娘さんとビデオ通話をするようになった。気が付いたらコロナ前よりつながりが広がったといいます。

吉沢町2区では、公民館での週2回の「お茶の間カフェ」を自粛し、町内を一周するお散歩会を平日毎日始めました。途中の公園でラジオ体操をして、東屋でおしゃべりもします。

80代の一人暮らしの方3人が毎日ウォーキングをしています。体調が悪いときは食事をおすそわけし、娘さんに連絡してくれる。ですから安心して一人暮らしができるそうです。

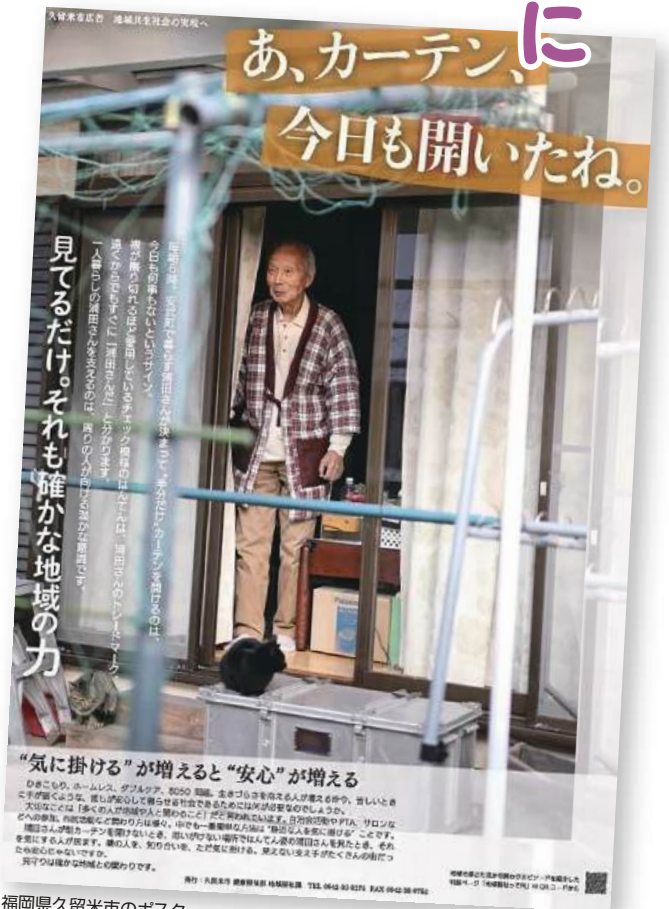
こうした頼り頼られるお友達や仲間との日常生活がみんなの人生を豊かにしています。「集める」から「集まる」への意識転換が必要かなと思います。

「あ、カーテン、今日も開いたね」と呼びかけるのは福岡県久留米市が作ったポスター。毎朝6時に浦田さんが半分だけカーテンを開けるのだそうです。「今日も何事も無い」というサインです。

住民たちは見ているだけ。「確かな地域の力」というポスターです。小さな気にかげ合いが大切だと思います。

「支えられ下手」から変わろう

東日本大震災の時、仙台市内国見地区



「お互い様」の関係で

ボランティアってどちらかというと「してあげる」話。「してもらいたい」人がいない限り、「してあげる」人ばかりいてもダメ。お互い様と言います。される側とする側が常に交互につながっていくことがとても大切です。

「つながる」ことから「気」になる存在「が生まれ、「気」にかけ合う仲」となって、ちょっと困ると「支えたり支えられたり」の関係になる。こういうことがないと孤立してしまいます。

孤立すると社会問題が起きてくる。孤立しないために、「いまあるつながりを切らない」。そして「新たなつながりも意識する」ことがとても大切です。



講演する池田さん

池田昌弘さんの基調講演が終わると、仙台市で子どもや高齢者向けに活動中のNPO法人の運営者、3人が登壇した。それぞれの活動内容を語り、ファシリテーターの進行によるパネルディスカッションで議論を深めた。

認定NPO法人「あかねグループ」
理事長 清水福子さん

マイカーで毎日配食、
地域の福祉拠点として活動



マイカーに夕食を積み込み配達へ



あかねグループの本部

あかねグループの事業

- 配食サービス事業
- 訪問介護サービス事業
- 総合事業
- あかねケアプランセンター

清水さんの講演スライドから

地域のボランティア団体として1982年に10人の有志が立ち上げました。高齢者が在宅生活を続けられるようにという思いで、ヘルパー訪問と配食、それに介護保険のケアプラン作成やサロン活動をしています。私は99年からボランティアとして加わり、8年前に5代目の理事長に就任しました。住民の誰でもが参加できるボランティア団体を目指すという

創業理念がずっと続いています。有償と無償のボランティアが70人もいて、理事として活動している方もいます。配食事業は、毎日、昼に60食、夜は150食ほどを届けています。200世帯前後になります。なかには、昼食と夕食の2回ご希望の方が7、8人います。厨房では40代〜80代のパート、ボランティアさんが元気がよく食事作りをしています。配食の担い手の多くはマイカーを運転する高齢の男性陣です。夕食だとお弁当を積み込んで午後4時頃に出発し、7台の車が2時間ほどかけてご自宅を回ります。サロン活動は地域の居場所づくりです。ヘルパー訪問していた利用者宅が空き家になり、二間と台所をお借りして週2回の「ふれあいサロン」を開いています。軽い体操や音楽・踊りの鑑賞、おしゃべりをしながら過ごします。昼食、おやつ付きで利用料は1回1980円です。本部事務所の1階のカフェでも、子ども食堂や認知症カフェを開いています。

NPO法人「おりざの家」
理事長 佐藤宏美さん

コロナ禍でひとり親家庭の
利用が増える子ども食堂

～実際の活動の様子～③

コロナ後 (2020年9月～現在)

期間との勝負！必死なボランティアさん

たくさんの野菜を使っています

フードパントリーの品々

佐藤さんの講演スライドから、右上も

～おりざの食卓 概要～①

コロナ以前 (2016・9月～2020・2月) の活動

- ◎実施日 毎週木・金曜日 16:00～19:30
- ◎場所 NPO法人 おりざの家内 (太白区長町1丁目)
- ◎登録制
- ◎費用 子ども無料：大人300円
- ◎内容 「食」を通じた地域の居場所 多世代で食卓を囲み夕食を食べ交流 学習支援・相談業務

自宅で玄米中心の料理教室を主宰していましたが、2013年にNPO法人「おりざの家」を作り食育推進と家族支援、生涯学習支援事業を始めました。16年に孤食や生活困窮家庭を対象に多世代向けの夕食支援の「おりざの食卓」を開きました。仙台市内の52の子ども食堂の中の一つで、毎週、木曜と金曜が活動日です。

コロナ禍での大きな変化は、会食からお弁当に切り替えたことと、ひとり親家庭の方々の利用が増えていることです。コロナ禍前には、40数人だった利用者が今では120人ほどに増えました。なかでも、ひとり親世帯がとて多くなっています。48の子育て世帯のうち、ひとり親世帯は40%も占めています。仙台市全体では、子育て世帯に占める比率は6%ですから、その6倍にもなっています。それだけコロナ下で、ひとり親世帯の困窮度が高まっていると思います。また、お弁当にしたことで、コミュニケーションが苦手なハードルが高かった方々がより参加しやすくなったこともあるでしょう。それと、フードパントリー（食材配布）が増えています。お米や野菜、麺、果物などを金曜日に軒先に出して置き、無料で自由に持ち帰ってもらいます。福島県のお寺さんなどから寄付を受けることが多くなつて実現しています。



「おりざの家」外観

認定NPO法人「キッズドア」 東北事業部長 対馬良美さん

貧困家庭向けにボランティアで 無料の学習支援



渡辺理事長 (右) も参加した学習支援



対馬さんの講演スライドから

キッズドアは、貧困家庭の子どもが無料で勉強を見てもらえる仕組みを作ってきました。学生や社会人たちがボランティアで教えることが出来、運営費用を企業や財団からの寄付で賄うという方式です。

2007年に渡辺由美子理事長が設立し、2010年に無料の高校受験対策講座「タダゼミ」を開講。翌年に無料の大



キャリア教育の様子

学受験対策、中退予防のための「ガチゼミ」を開講しました。

東日本大震災後には、東北地方で被災者支援活動に乗り出し、現在も続いています。

設立以来、国や自治体に提言を続けており、渡辺理事長は内閣府の「子供の貧困対策に関する有識者会議」のメンバーになっています。

コロナ禍になり、ボランティア活動を志望する人が増えてきています。

せっかく大学に入学しても自宅でオンライン授業のため友達が出来ない、サークルや部活動の休止などで、人とのつながりを求めてボランティア活動に参加する大学生が増えました。

社会人も、終業後の飲み会や趣味の活動がなくなり、空いた時間を有効活用したいと思う方が増えたようです。

パネルディスカッションで

浅川 コロナ前とコロナ禍で変わったことは何でしょうか。

佐藤 元々高齢のスタッフが多いので、狭い調理場で密で働くのが不安でボランティアが減りました。

清水 作る弁当の数は変わりません。感染者宅への配達では手渡しせず、玄関先に置いています。

対馬 緊急事態宣言の時は、学校が「不要不急の外出をするな」と言っているので、「出て来て」と言いにくかった。オンラインで学習支援をしたり、1日中親と一緒に外に出れないストレスを減らすため、おしゃべりをしました。

学生も社会人も時間にゆとりが出て、ボランティアになる人が増えました。

佐藤 人と話すのが苦手な人は会食を利用できなかったのですが、弁当配布で初めて利用した人が何人かいます。潜在的なニーズを拾えたので、コロナは悪いことばかりではありません。コロナが鎮まり会食ができるようになって、会食と弁当の両方行っていきたい。

浅川 ボランティアの受け入れ方や活動の様子は。

清水 その都度募集しています。男性は、定年退職後に何かできることをと来られます。弁当配達の車を運転する「カーボランティア」や草取りのボランティアになります。

女性は、友達の口コミで来るという人が多いです。

佐藤 子ども食堂の活動をちょっとのぞいてみたいと来られる。目的や意識はバラバラです。志をもってやりたいと来ても、半年、1年と経つと、意気込みがしばらくでいていく人がいます。

どうにかモチベーションを持続させていくために、どうしたらいいかスタッフで考えています。利用者との触れ合いをとってもらったり、利用者にメッセージカードにコメントを書いてもらったりしています。子どもや困っている人の役に立っている、喜ばれていると思ってもらう工夫をしています。

浅川 自分がやっていることが社会に役立っていると思うことが、ボランティア活動の継続に効果がありますね。

ところで、キッズドアにはシニア向けのメニューはあるんですか？ 中高生向けの個別指導だと学生が多いと思いますが。

対馬 そんなに専門的に教えられなくても、一緒に考えているという姿勢でやっており、先生や塾講師の経験はなくても大丈夫です。



左から清水さん、佐藤さん、対馬さん

基調講演

ボランティアは「恋愛」に似ている

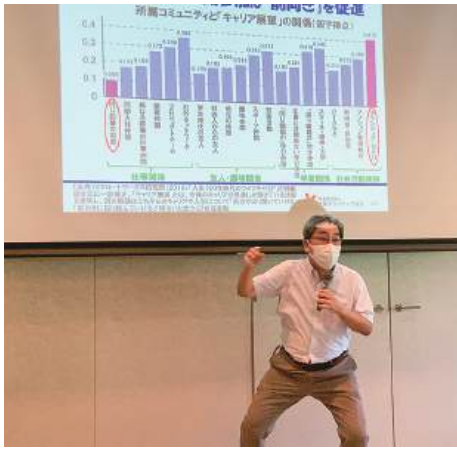
早瀬昇さん

社会福祉法人 大阪ボランティア協会理事長

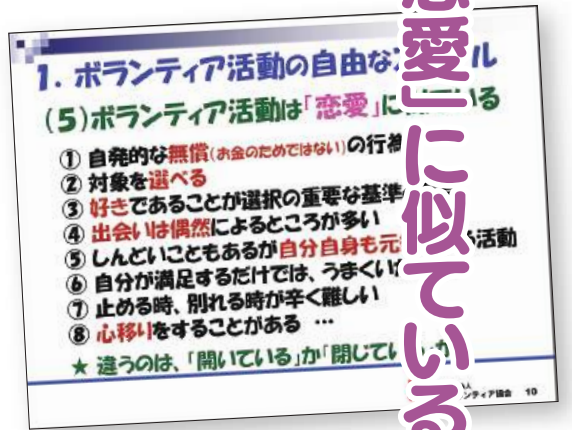
ボランティア活動はとても自由なスタイルだとまずご理解頂きたい。ボランティアのガギは「やる気（自発性）」と「世直し（社会性）」、「手弁当（無償性）」です。「放っておけない」からする。我慢してではなく、我慢できないからするものです。

社会性は「行政」の役目なので、お役所のようなスタイルが必要という勘違い、誤解があります。行政というのは、公平・平等にしますよね。全体の奉仕者だから。でもボランティア活動は「好き」から入るのです。自主的活動だから公平でなくていい。

ボランティア活動は固いと思われる理由に、一度始めたらやめられないかと思われていることがあります。「細く長く」と



熱弁を奮う早瀬さん



言いますが、「長く続けるために、派手さは避け地道にコツコツ」という意味ではない。本来は「細くても良い。長く続けた方が楽しい、面白い」くらいの意味です。

私事を社会に「開く」

ボランティアは普段の暮らしに近いものです。では、どうすればボランティアになつていくのか。ヒントは「開く」です。趣味で美術品を集めている人が、その美術品を公開したら私立美術館になる。企業の福利厚生施設を開放すると社会貢献活動になる。私たちが休日に子どもや孫のほかに、近所の子どもを誘って出かけると地域の子ども会活動となる。これが「開く」ということです。

大阪には町人が架けた橋がたくさんある。淀屋はなぜ淀屋橋を架けたか。「渡りたかったから」であり「渡らせたかったから」です。自分の店にお客さんが来て欲しかった。つまり、「自分のため」でも、「み

んなのため」にもなれば、「公共的」になる。自分のためだけでも良いが、そうでもなくとも良い、そういうものです。

ボランティア活動とよく似ているのは「恋愛」です。好きであることが重要。対象を選べる自発的な無償の行為。しんどいこともあるが自分自身が元気になる。自己満足ではうまくいかない。心移りもある。違うのは、開いているか閉じているかです。私たちの暮らしは閉じたり開いたりしています。

ボランティアは「不公平」だ

阪神・淡路大震災で救助された要救助者の4分の3は近隣住民によるものです。自発的だからこそその強みとして、機動性、多彩さがあつたからです。特定の誰かのために思いを込めて活動できるから「温かい」のです。

温かさは不公平なのです。公平な温かさなんてありえない。ほかならぬあなたのために、というのは家族にもできる、友達にもできる、ボランティアでもできる。だが行政にはできない。

しかも自己責任で活動できる。行政が作る公平な公共サービスは土壌で、その上に、多様な不公平な市民サービスが花を咲かせる。つまり、お役所の穴埋めではなく、役所を超えてできる。そういう存在です。

住民Aが焚火をしようと、その煙で住民Bが迷惑だと役所に訴える。両者の間につながりがなく、「お客様化」社会なので役所は禁止命令を出す。本当は住民同士で話し合いや「私もまぜてよ」となればいいのに。他人事でなく自分が一緒に活動し

当事者になると「どうしたらよいか」「自分で何かできないか」と思うようになる。自分が主体になってくる。

活動に参加すると元気に

認知症の地域別有病率の表を見てください。6つの地域の中で島根県海士町だけが85歳以上でもあまり増えていない。不思議な地域です。なぜか。

子どもがいなくなったので始めた鳥留学制度の効果です。住民が皆役割を持ち、活動を進める立場になったからです。役割があると元気になる。いろんなことをどんどん自分たちでするまちになった。

健康寿命の3要素は運動、栄養、社会参加ですが、社会参加では市民活動、ボランティア活動が重要だという調査結果は多い。それは明らかです。介護予防になることは明確で事例もたくさんあります。

実際にどのようにするか。趣味でも得意なことでも、好きなことからだと入りやすい。最初は半身でいい。思いつめない。愛されることは大切ですが、愛することとはもつと大切です。家族や仕事を愛してきた。それが我々の支えでした。でもいつか子どもたちは巣立ちいつか仕事もリタイアする。

そういう時に、地域で好きなものが何かあると元気になります。ボランティア活動というのは自発性が大事。自発的とは、言われなくてもする、言われても納得しなかつたらしない。

MUSTではありません。CANの世界です。いろんなスタイルでできる。仲間と役割を得て、自分自身もますます元気になり素敵な地域を創造していきましょう。

早瀬昇さんの基調講演に続き、3人の登壇者が自身の活動について話した。その後、パネルディスカッションで議論を深めた。

バザールカフェ 狭間明日実さん

誰もが弱い存在でいいはず



建物は著名な建築家のヴォーリスが設計した



宣教師の元住居を改修してカフェに。上は手書きの「サンガイ飯券」

米国人宣教師の元住居を改装して24年前に開設したのがバザールカフェ。バザールとは市場のこと。市場のように人が集い行きかう場所を目指しています。日本基督教団京都教区と市民団体の共同事業として始まりました。

薬物依存症や就労が難しい人、滞日外国人などからいろいろな人の相談を受けたり、社会とのつながりを見出す場にしていきたいと思っています。

ボランティアとして、カフェの調理や配膳、庭の手入れなどに参加して

もらうこともよくあります。

誰でも700円のランチを無料で摂ることが出来る「サンガイ飯券」という食事券を2年半前から始めています。ランチを食べ終わって、もう一人分をレジで支払うとこの券がレジの前に張り出されます。後日、別の誰かが自由に使って「サンガイ飯」を注文できるものです。

お金を出す支援者と、それを受ける人が共に誰だか分からないところが特徴です。これによって、支援を受ける側の遠慮が消えてしまうことにもなります。

既に400枚以上も使われています。サンガイとは、ネパール語で「共に」ということです。

NPO法人「happiness」 理事長 宇野明香さん

子ども食堂から
高齢者カフェまで



宇野さんの講演スライドから



ハピネスカフェの入り口

ボランティア団体のハピネスが子ども食堂を始めたのは2016年でした。共働きの家庭で、孤食を余儀なくされたり、きちんと食事を摂れていない子どもがいなかと考えたからです。

立ち上げ当初は里子の受け入れはしていませんでしたが、現在2人の委託を受け

ています。仕事を別に持ちながら、子ども食堂を週2回開き、翌年には6人の大学生や10人ほどのボランティアさんを集めて夕方19時の学習会をスタートさせました。

いずれも、自宅近くの唐橋文化教育会館内です。

18年には、高齢者向けのコミュニティカフェ「ハピネスカフェ」を一軒家で開きました。子ども食堂を続けるためでもありました。翌年、NPO法人となりました。

さらに、22年2月には思春期の女性向けの一軒家のシェルターの運営を始めました。「安全な家出先」として、心理士や看護師も関わるようにしています。子ども食堂に通っていた子どもたちが中高生になり、家族と折り合いが悪くなった時に行き場がなくなる状況を見ってきました。

児童相談所の管理的な一時保護しか現行制度では彼女たちを受け止められませんが、



ハピネスカフェ外観

NPO 法人「つながる KYOTO プロジェクト」 立命館大学准教授 小辻寿規さん

ボランティア活動から 社会を見る眼差しを



地域と学生をつなぐ活動



コミュニティカフェの事例紹介



NPOの活動から新聞で紹介された

立命館大学の学生時代から「人と人のつながり」に興味を持ち研究を始めました。孤独死や社会的孤立、まちの居場所（コミュニティカフェ）をテーマにしてきました。

研究するだけでなく、自らボランティア活動や市民活動を実践してきました。理

事を務める「つながるKYOTOプロジェクト」では、コミュニティカフェの普及やその支援・研究活動とまちづくりの支援活動をしています。

活動の際に心掛けているのは、①メンバーの強みを生かす ②専門外のことにはあまり手を出さない ③外部の人を巻き込む ④活動のゴールを設定する ⑤無理をしない——ことです。

私が考えるボランティアとは、①自発的に他人・社会に奉仕する人または活動 ②本質は自発性と社会的な問題提起やその解決 ③無理やりやらされるものではない——。

地域社会でのフィールドワークで得たことを大学でのデスクワークに結びつけ、相互に循環させることが重要です。そうすることで、社会活動を通して学んできた市民性を研究の中で育むことが出来ると思います。

パネルディスカッションで

浅川 ハピネスのシェルター「ハピネスハウス」とバザールカフェの「サンガイ飯」に注目しています。始めた動機は何ですか。

宇野 子ども食堂に来ていた子どもが高校生になって家出し、危険な目に遭う。それを止めようとハウスを始めました。

児童相談所の一時保護所はまともに保護できていません。ひもがない服に着替えさせられたり、上の下着を着させてもらえなかったりします。スマホを取り上げられて外に連絡できなくなり、普段の生活のつながりが考慮されなくなったりします。一時保護所に行ったことのある子は、二度と行きたくなくなるのです。そこで、何とか夜を過ごさせてくれる大人を頼ってしまう。

それを何とかできないかと始めたのがハピネスハウスです。家出少女を保護したら逮捕されるとかグレーの世界です。行政や社協の応援はもらっていますが、それらのお墨付きというわけではありません。

浅川 対応しているのは専門職ですか。

宇野 夜勤は看護師や心理士が有償ボランティアで対応していますが、学生もいます。

浅川 バザールカフェのサンガイ飯券はボランティア精神にあふれた仕組みだと思いますが、どのような経緯で始めたのですか。

狭間 緊急事態宣言の1回目の頃、情報が少なく、どうした

らよいかかわらないと、居合わせたスタッフ6人が話し合っ始めました。2年

半たって、350枚くらいやり取りされていると思います。

意外と大人の人が使っています。顔が分からない匿名の寄付ですが、あげる人が食券にメッセージを書いたり、使った人が感想を書いたりしているので、コミュニケーションしている社会参加の一つの形と言えます。

誰が提供したか分からないので、「食べさせてもらっている感」がないのがいいと思う。バザールカフェという共通の空間だから使えるということでしょうか。

浅川 今の社会の制度にはありそうでない。特定の空間での共有体験、一体感というものでしょうか。

小辻 ハピネスカフェは、かわいそうだからやっているというわけではないというところが素晴らしい。手伝っている学生も勉強になっていると思います。

バザールカフェは、双方が同じ人として接するのが素晴らしい。「施し」ではないのが重要です。



左から浅川理事（ファシリテーター）、小辻さん、宇野さん、狭間さん

「ボランティア活動の現場で感じたこと、学んだこと」 見学者からの報告

地域共生社会を目指すボランティア活動の担い手育成のために、現場での見学実習を行いました。仙台市の「キッズドア」と京都市の「バザールカフェ」、「ハピネス子ども食堂」に伺いました。

7人の参加者から事業内容とボランティア活動についての感想が届きました。どのようところが印象に残ったかがよく分かります。

キッズドア

性格や能力に合わせて

▼日野真弓さん（11月19日に訪問）

貧困や不登校、発達障害を持っている子ども達に対して、きめ細かな学習支援を行っていて、子供達ものびのびと学習会に参加していた。

体験ツアーや見学会、交流会などのイベントを企画し、食料支援にも力を入れ活動は多岐にわたる。子供達の成長の後押しに、ただただ頭が下がる思いがした。

ボランティアの方は、子供達の性格や能力などに合う教え方、接し方を工夫して話しかけていた。皆さん楽しそうに参加され、とても雰囲気良かった。

学生が多いが、定年退職者も参加され、子供達は色々な年齢層の方と接し、人間関係のよい勉強になると思った。

▼都築広子さん（11月19日に訪問）

学習支援のほか、企業にもお願いして食料支援も同時に行われていてとても良いと思う。生徒さんが継続して通えるよう好感が持てました。

学生ボランティアの多くが、弟や妹に接するように親しみを持って教えているように感じました。ボランティアの方も楽しんでいるように思えました。

▼袖原結女さん（11月19日に訪問）

子ども達一人ひとりに合わせた学びが実践されていると感じた。ボランティアの方は1人につき1人、または2人の子どもに学習支援を行っているため、子ども達の状況を把握しやすく、それぞれに応じた学習が進められていると感じた。

ボランティアの方々はみなさん笑顔が多いと感じた。子どもの話を聴き、一緒に学習を進めるというスタンスがとられていた。

ボランティアの方々幅広い年代の方が多く、子ども達にとっても、幅広い年代の人とコミュニケーションを取れたり、色々な考えに触れることができることに繋がるのではないかと感じた。

▼菅原惺奈さん（11月19日に訪問）

実習を受ける前は、こんなに明るい雰囲気とは想像できなかった。中学生の皆さんは気さくでこちら側までエネルギーを



キッズドア仙台教室の様子

もらえた。

中学生の皆がリラックスして楽しそうなのは、ボランティアさん達との信頼関係があるからだと思った。

勉強だけではなく、話を聴いてあげたり、一緒にお話をする事で新しいコミュニケーションの場となっていて、すごく素敵です。

ただ教えるだけでなく、一緒に考えたり、1人で考える時間を設けるなど、それぞれの子に合わせたやり方なのも魅力に感じた。

バザールカフェ

皆でフィリピン家庭料理を

▼大道文字さん（11月19日に訪問）

カフェの運営では、「共に生きる場」を創出されていると思った。「多様性」「共に生きる」「バリアフリー」「ユニバーサル・プレコーション（標準予防策）」をキーワードに活動されている。

フィリピンの方がシェフで、フィリピンの家庭料理をみんなで協力して作られている。それぞれの方が出来ることをされ、工夫して意見を出されている。料理のメニューは毎週違い、国際色豊かである。居心地のいい空間が作られていると思う。

▼土井義久さん（11月24日に訪問）

キリスト教の方々や地域の方々協力して、民家を改築されたことを学んだ。

前日に開かれたフェスタの後片づけからカフェの営業だけでなく、ボランティアが役立ることがあると学んだ。ボランティア活動に対する考え方が良い意味で変わったと感じた。

ハピネス子ども食堂

ラインで予約は便利

▼F・Oさん（11月23日に訪問）

訪ねた日は、祝日のため子どもたちが少なかった。それでも予約なしで来る子ども達もおり、ボランティアと遊んだりしていた。参加の予約をラインで行うのは便利だと感じた。

大学生や社会人などボランティアさんは様々であった。よく来る学生には、子ども達もなついていた。朝から料理の準備をしていたというボランティアもいた。「出来る人が出来ることをやる」という考え方がよく分かった。

『ふれあいねっと』は、個人会員726人(うち個人正会員100人)のほか、以下の法人・団体のご協力により、発行しています。

(N)ウェアラブル環境情報ネット推進機構／(一財)高齢者住宅財団／(公財)さわやか福祉財団／(N)SSSネットワーク／(公財)テクノエイド協会／(N)東京山の手まごころサービス／東友会関東支部／トップラン・フォームズ(株)／(一社)日本産業カウンセラー協会／(N)日本心身機能活性療法指導士会／(一社)日本青少年育成協会／久光製薬(株)／(N)りすシステム／YKK AP(株)

※五十音順。(株)=株式会社、(有)=有限会社、(一財)=一般財団法人、(公財)=公益財団法人、(一社)=一般社団法人、(公社)=公益社団法人、(学)=学校法人、(N)=NPO法人

表紙の写真は：

右上隅 ● 「地域共生ボランティアのすすめ」啓発イベント(京都会場)の参加者とスタッフ(P3、7～9)

左中央 ● WACのホームページに掲載した日本財団助成事業の案内に誘導するアイコンとチラシ(P3～10)

下の左から ● 花見をするデイサービスまごの利用者とスタッフ(P2) ● パザールカフェの「サンガイ飯券」を使って食べた人の感想と店内風景(P8)



2023年2月15日発行 通巻286号

発行人：升田 忠昭

編集人：浅川 澄一

編集：昆布山 良則

発行：公益社団法人・長寿社会文化協会

〒105-0011

東京都港区芝公園 2-6-8

日本女子会館 1 階

TEL：03-5405-1501(代)

FAX：03-5405-1502

制作：岡村直実(JCユニット)

定価 1冊 400円

元理事の亀川昌一さんが逝去

WAC 元理事で顧問の亀川昌一さんが2022年8月6日に亡くなりました。93歳でした。

ご連絡いただいたご子息の亀川昌弘さんによると、「必ず葬儀後 WAC 本部に知らせるように」と頼まれていたそうです。

亀川さんは、北海道庁出身で WAC の古くからの会員さんです。札幌市を中心に高齢者疑似体験の講習などで活動されてきました。1998年5月から2004年5月まで理事も務めていただきました。

2001年10月に行いました「第11回 WAC 在宅介護フォーラム in 北海道」でご一緒したのが懐かしく思い出されます。当時、私はフォーラムの担当で、亀川さんは実行委員長でした。

WAC 総会の時は上京して出席してくださいましたし、コロナ禍になってからは電話で WAC の状況を尋ねられるなど親身になって WAC にご貢献くださいました。

昨年3月に発行した「ふれあいねっと 284号」に寄付を頂いたばかりでしたのに残念です。ご冥福をお祈りいたします。

(事務局長・常務理事/小林里美)

亀川さんとの思い出はたくさんあります。WAC の総会後に食事のお誘いを頂いたり、北海道の研修会でも食事をご一緒させて頂きました。

昨年は LINE で、東京に来た時にはお会いしようねと、お約束をしましたが、果たせなかったことが心残りです。北海道弁かと思いますが話の後に必ず「なんも、なんも」と仰っていたことを思い出します。

WAC の事をいつも考えていた方だと思います。亀川さん、本当にありがとうございました。(WAC さしすせそ/成塚江見子)



2016年6月のWAC定時総会で意見を述べる亀川さん



あなたの暮らしをもっと豊かに、生き生きと

公益社団法人長寿社会文化協会 **WAC** へ入会しませんか!

WACはWonderful Aging Clubの略

楽しく年を重ねていきましょう!

個人賛助会員の年会費は3,000円、会員誌『ふれあいねっと』が届きます(個人正会員の年会費は、10,000円)

●WAC会員の特典●

会員が安心してWACの活動に取り組めるよう、会員補償制度を設けています。

●ご入会およびお問合せ●

〒105-0011 東京都港区芝公園 2-6-8 日本女子会館 1 階 公益社団法人長寿社会文化協会 ☎03-5405-1501(代)

●年会費のお振込先●

ゆうちょ銀行振替口座 00150-1-33737 公益社団法人長寿社会文化協会

「ふれあいねっと」バックナンバーのご案内

1冊400円、かわら版は1部100円(いずれも税込) + 送料(メール便)でお分けします。代金後払い(郵便為替・銀行振込、手数料お客様負担)です。
在庫がなくなり次第販売終了となりますので、あらかじめご了承ください。

2022年8月号 (No.285)



- Message (京極高宜 会長) 「レゾン・デートル」を再認識
- WAC 定時総会 事業収入はマイナスに コロナ禍で収入減が響く
- 主要事業の報告 地域共生ボランティアの養成講習 苦労しながら再開した品川区料理教室
- 全国のWACポイント一覧
- 新人職員紹介

2022年3月号 (No.284)



- 認知症啓発イベント「長谷川和夫先生が伝えたかったこと」——長谷川和夫 WAC 元会長の「認知症ケア」講演記録を視聴
- 「認知症当事者に向き合う先生」看護師・五島ズさん
- 「働く認知症デイ」に取り組む WAC さわか清水
- オンラインで高齢者疑似体験の研修
- 「チームオレンジ」の参加者へ研修

2021年12月号 (No.283)



- Message WAC 勤続 22 年を迎えて
- 成年後見制度 コミュニティカフェを 市民後見の活動拠点に
- 主要事業の報告 コミュニティカフェ講座は対面で開講 22年3月で幕の「みなと＊しごと55」
- ふれプラの利用者は例年の半数に
- 神聖な会場で国旗の受け渡し
- 「編集長の眼」No.12

2021年8月号 (No.282)



- Message (升田忠昭 理事長) 生涯現役社会の実現に向けて 理事長 3 期目の抱負
- WAC 定時総会 コロナ禍でも 1331 万円の黒字 事業収入は 1790 万円の減
- 理事会 5 人の業務執行理事を決定
- 主要事業の報告 千葉市、埼玉県伊奈町、東京都府中市で コミュニティカフェ開設講座
- 全国の WAC ポイント一覧
- Ribinet (福祉理美容師ネットワーク) が毛髪の寄付を受付中!!

2021年3月号・かわら版コロナ禍・医療特集号 (No.281)



- コロナ禍における訪問介護サービス
- インタビュー「聞こえの保障」の大切さ
- 千葉県福祉ふれあいプラザから 認知症「症状」と「病気」の違い
- 教えて! 高齢社会 Q & A 統合医療について
- コロナ禍での私の新生活 ～看護師の知識と経験を活かしながら
- 第4代回会長の藤井威さんが逝去

2020年11月号 (No.280)



- Message (升田忠昭 理事長) 「WAC のさらなる発展のために柔軟な発送で時代を先取りする」
- 「死者」から学ぶ「普通の暮らし」
- WAC 定時総会 書面決議方式で開催 前年度収入は 2 億円超、564 万円の黒字
- 主要事業の報告 各部門のコロナ対応
- 全国の WAC ポイント一覧 京極会長の著書紹介

ご注文

お送り先の郵便番号、住所、電話番号、氏名、希望の号、冊数を下記までお知らせください。

WAC WONDERFUL AGING CLUB 公益社団法人長寿社会文化協会
 ● E-mail : iken@wac.or.jp ● FAX : 03-5405-1502 ● TEL : 03-5405-1501